



浪江の こころ通信

● 第87号 ●

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聴き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第87号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





福島県

門馬 文雄さん・けい子さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 谷津
取材日：7月18日

明日どうなるかなんて分からないから、普通に暮らせればそれでいい



▲ご自宅居間にて、文雄さんが手にしているのはカラオケ大会入賞でもらった盾

いわき市の復興公営住宅に暮らす文雄さん・けい子さんご夫妻。2年前に福島市内の仮設住宅から移り住みました。ここでの生活は、支援団体などのお陰もあり不自由なく充実しているとのことですが、どこか落ち着かない気持ちも抱えていらっしゃいます。

◆**浜通りの気候が合っています**
2人とも浪江町で生まれ育ちました。3月11日の震災発災後は福島県内の避難所を転々とした後、娘のいる北海道の帯広に行きました。帯広では、かつて三菱自動車の寮だったところを貸していただき、8月まで滞在しました。現地の方にも大変よくしていただき、このままここに住んでどうかと言われましたが、福島に母を残してきたこともあり、そういうわけにはいかないと、戻ることになりました。その後は、福島市内の仮設住宅に数年暮らし、2年前の春に、現在暮らしているいわき市の復興公営住宅に移りました。

ここは買物の便もよく、集会所で週2回のカラオケやコーヒータムが充実しています。支援団体が企画するイベントや日帰り旅行などもあるのですが、退屈せずに暮らしています。浪江町では海の近くに暮らしていますが、今も海の

◆**時の流れに身を任せて**
今はここで不自由なく暮ら

近くなので気候が似ていて、やっぱり落ち着きます。福島市では雪が多くて、冬は毎日雪かきをしなければならなかったし、雪道の運転が怖かった。夏も、海風がない内陸の暑さがこたえました。いわきに移って、やはり浜通りが合っているなと思っています。

◆**カラオケ大会に参加**
去年、NPO法人みんぶくの企画でいわき市内の復興公営住宅対抗のカラオケ大会がありました。私はこの団地の代表として出場し、「対馬海峡」を歌って審査員特別賞を受賞しました。同じ団地に住む人たちが30、40人くらい応援団として駆け付けてくれて、応援用のうちわを作ってくれて、応援の賞もあるのですが、うちよりも大きなうちわを作ったところが表彰されていました。応援団の人数はこちらの方が多かったのですが、うちの大き

浪江町ではずっと持ち家の一軒家だったので、団地住まいにはなんとなく慣れません。以前は畑も持っていました。今は土いじりが自由にできないのが残念です。中古住宅を探しているのですが、なかなか見つからないものですね。浪江町は育った所なので愛着もありますし、戻りたい気持ちもありますが、家族の意見がなかなかまとまりません。郡山に家を建てた長男が「来たら」とも言ってくれますが、私たちが使える部屋は一つしかないのです。まだここで自由になりたい気持ちがあります。いろいろな考えと心を決めることができず、ここで暮らしながら時の流れに身を任せるしかないかなと思っています。



福島県

氏家 美智子さん(津島)

取材者：バーグ・プラン研究室 深田
取材日：7月12日

多くの人たちとの出会いに支えられて、今の私たちがあります



▲氏家さん ご自宅玄関前で

二本松市針道では、今年も「中島の地蔵桜」観桜会が行われました。針道で5年間避難生活を送った氏家さんは毎年参加され、地域の方々との交流を続けていらっしゃいます。現在は、同市安達地区に家を建てられ、新たな暮らしを始められて3年目を迎えます。そんな氏家さんに、針道との関わりや現在の暮らしぶりについてお聞きしました。

◆**今年も観桜会に参加**
二本松市針道の「中島の地蔵桜」観桜会が、つばみが膨らんできた地蔵桜近くのさくら広場で盛大に行われ、招待された私たちが夫婦も針道に避難していた浪江町民と共に参加しました。今年は、4年前に私たち夫婦が寄贈したしだれ桜が初めてきれいな色の花を咲かせ感激しました。

◆**針道での避難生活**
浪江町津島で農業をしていた私たちが夫婦は、震災直後、寒さを防ぐ布団だけを持って長男夫婦とその孫2人の家族6人で二本松市に避難しました。主人の性格が大変繊細で気を使い過ぎることから、仮設住宅での避難生活は無理と考え、息子がネットで見つけて移り住んだのが針道の「佐勢ノ宮団地」でした。私たち家族はここに、その後5年間を過ごしました。この間、地区の方々には温かく迎え入れてもらい、焼肉会やカラオケ、バーベキュー大会等に誘っていただくなど、いつの間にか親しく飲み合う間柄になっていました。私たちは、こうしたご恩に

◆**故郷津島の現状**
避難中は、置いてきた飼い犬に餌をやり定期的に帰っては掃除や草刈りをしていました。犬の状態は、家・屋敷は比較的きれいな状態です。また、今年の春先は暑かったせい、家の周りの桜や梅を始めいろいろな花が一斉に咲き誇りきれいでした。しかし、津島に帰っても人や車を見かけることはほとんど無くて寂しい気持ちになります。実家があるうちは、時々帰っては草刈りや掃除を続けたいと思っていますが、私たちがどううにもならないイノシシ対策や家の前の道路の側溝にたまった

◆**多くの方々との出会いに感謝**
大変な避難生活の中でも私たちが恵まれていたと思うことは、家族一緒に避難生活ができたことです。針道では同じ団地で、今はこの二本松市安達地区内で一緒に住み、孫たちともいつでも会うことができます。もう一つは、避難先々で多くの方々との出会い、支えられたことです。地域の方々や避難先で出会った浪江の方々、郷里の友人や仲間たちなどいろいろな恵まれ、その励みがあったから今の私たちがいることに感謝するとともに、今後もこれらの方々との絆を大切にしていきたいです。